

令和元年 11 月 29 日
中区役所ホール

『母さんも、愛してるよ。』

皆様、こんにちは。初めまして。

ただいまご紹介いただきました、大山優子です。

本日は、犯罪被害者支援特別講演会にお招きいただきましてありがとうございます。関係者の皆様、本日この会場にお越しいただいた皆様、本当に心から深く感謝申し上げます。

これから講演をさせていただきますが、私はこの2年間、岡山县内の大学、専門学校、警察署などにおいて、多くの方々に『母さんも、愛してるよ。』を聞いていただきました。

そして、この度ご縁をいただき、県外で初めて、この会場で、これからお話をさせていただきます。

『母さんも、愛してるよ。』とは、娘が生前、私たちそれぞれ家族に当てたノートの走り書き『愛してるよ』に、私がずっと呼応し続けている言葉です。

私の話は、子を思う親の気持ち、犯罪被害者遺族になっての実際の現状、沢山いただいてきたご支援に対する感謝の気持ちなどです。

来月12月で、事件より丸4年を迎えます。

今でも娘の話をいたしますと、20年間の娘との思い出が甦り、私の記憶の中にある、あの時、あの瞬間の娘の仕草や表情や声までもが思い返され、涙が溢れてしまいます。

また、話も上手にはできません。ですので、多々お聞き苦しいところはあるかと思いますが、どうぞご了承ください。

でも、涙が溢れても、話が上手くできなくても、こうして皆様の前に立ち、話をさせていただくということは、この4年間、沢山の温かなご支援をいただいたことに対する、今できる私の精一杯のご恩返しだと思っています。

一母親、一遺族の話ではありますが、私の思い、娘の思いが、皆様の心に届きますことを願っています。

今日は、どうぞよろしく願いいたします。

すみません。これからは着席して話を続けさせてください。失礼します。

娘真白は、平成27年12月、兵庫県加古川市加古川河川敷で殺害されました。

被告人は、娘とはそれまで何の繋がりも無かった男で、娘の専門学校での同級生の友人でした。犯人逮捕まで2か月半、裁判まで約1年待ちました。

事件発生より来月で丸4年です。今でも心からの苦しみから解き放たれることは決してありません。

娘の部屋から持ち帰った荷物はまだ手付かずの物が多くあります。

警察署から返していただいた、事件当時身に着けていたお気に入りの真っ白いセーターは泥だらけですが、洗うと娘の全てが消えて無くなってしまいそうなので、そのままそっと仕舞ってあります。

洋服ダンスや靴箱に仕舞ったままになっている服や靴に目が留まってしまうと、当時の娘の面影を思い出し、涙が溢れてしまいます。

一体どのくらい涙があるのかと思うくらい涙を流してきました。

私のことを心配して、周りの方は声を掛けてくださいました。

「泣いていると真白ちゃんが悲しむから、泣かずに前を向いて頑張ろうな。」私は心配を掛けたくないなので、どうにか返事をしましたが、涙は止まらず、悲しみは増しました。

それでも現在、沢山の温かいご支援をいただけたお陰で、心が折れそうになっては、何とか自分で立て直し、その繰り返しですが、毎日を過ごせるようになりました。

事件後、私たちの生活は、180度変わってしまいました。

心から笑ったり、喜んだり、楽しんだり、今まで普通に持ち合わせていた感情は、全く無くなってしまいました。

出口の全く見えない 暗く深い闇の中へ突き落とされたようで、前を向いて進んでいくことも、後ろに引き返すこともできず、現実を受け止められずにいました。

私は、娘を失った悲しさに加え、毎日容赦ない過激な報道に心が乱れ、食べられない、眠れない状態で、家の外へ一歩も出ることができませんでした。

パートの仕事へも出られず、買い物にも出掛けられませんでした。

そして、何より辛かったのは、当時高校3年生であった息子の高校の卒業式に、とうとう出席してやれませんでした。

毎日、朝が来るのが辛く、家の中にいても、何気ない通りの気配や外から聞こえてくる何気ない話声でさえも、「娘のことを言っているのではないか。」、「何か悪い話をしているのではないか。」と恐ろしく感じました。

そのような状況の中、刑事さんからの連日の事情聴取、検察官からの事情聴取を受けなければなりませんでした。

娘の部屋の引っ越し作業などもありました。

次々と消えて無くなってしまいたくなるような日々を、多く過ごさねばなりませんでした。

何が何だか分からないうちに、色んなことが進んでいきました。

日に日に衰弱し、気持ちの余裕が無くなっていく私は、カウンセリングを受けながら、裁判の準備を進めていきました。

しかし、やっとの思いで臨んだ裁判では、娘も、私たち家族も、決して納得のできる結果は得られませんでした。

全く真実は明らかになりませんでした。

娘は、小さな頃から、お絵描き、本読み、歌を歌うことが大好きな子でした。中でも、絵を描くこと、本読みは、小学校の担任の先生から褒められ、強く自信に繋がっていたようでした。

幼いときは、一緒によく広告の裏の白い紙に、チューリップやウサギやお人形などを喜んで描いて遊んでいました。

いつの間にか器用にトーンやパソコンなどを使って、自分の世界を楽しみながらデザイン画を作っていました。

読書は国語の音読をいつも褒められていたのがとても嬉しくて、家族の前でも大きな口を開けて、良く通る大きな声で何度も読んで聞かせてくれました。

今思えば、それは夢への第一歩だったのかもしれない。

中学3年になり、娘はアニメやデザインの学科のある学校に進学したいと言い出しました。

自宅から遠いこと、私立であるためお金が掛かること、私がアニメなどにあまり理解を持っていなかったことで、娘と意見が合わず対立しました。

私は自分の気持ちばかり押し付け、娘の思いを聞いてやろうとしませんでした。

しかし、娘が選んだ高校生活は、とても充実して楽しく過ごしているようでした。

友人にも、先生にも恵まれ、3年間恵まれた環境で授業を受けられ、頑張っていました。

また、アルバイトも入学当時から始め、授業後、土曜日曜、と頑張っていました。

遊園地、パン屋さん、レストランと掛け持ちをしていたこともありました。ただ働くだけでなく、家で教えられなかったことを、職場で時に厳しく、でも愛情を持って教えていただき、育てていただいていたようで、家で失敗話や嬉しかった、楽しかったことなどを色々話して聞かせてくれました。

専門学校へ行っても、養成所へ行っても、アルバイトを頑張っていました。

「もうアルバイトは止めなさい。女の子だから危ないからもういいんじゃない。」と、私は何度も止めましたが、学校の合間に続けていました。

高校生の時、アルバイトで貰ったお金を授業料の足しにして欲しいと手渡してくれたことがありました。

私は、その気持ちがあまにもいじらしく、純粹で、とても嬉しかったのを今でも覚えています。

あの時の娘の顔を思い出すと、今でも愛おしくてたまらない気持ちになります。娘はもしかしたら、高校を自分の意志で選択したときから、私たち親に対し、申し訳ないという気持ちを持っていたのかも分かりません。

だからこそ、少しでも私たちに迷惑を掛けないようにと、全てに一生懸命だったのかと思います。

そんな娘の努力の結晶を、被告人に全て奪われてしまいました。

高校を卒業後、娘の選んだ進路は、神戸の声優の学科のある専門学校でした。私の思いとはまたまた大きく違う選択に戸惑いましたが、娘が色々なオープンキャンパスを行って選んだ学校の1つでした。

私たちは応援してやることしかできませんでした。

娘は声優というより、ナレーションの道に進みたいと思っていたようで、卒業後は、大阪の養成所へと進んでいきました。

私は、専門学校での親の参加できる行事には全て参加しました。

入学式、新入公演、懇談会、進路説明会、卒業公演、卒業式、いくら反対していても娘が頑張っている姿を見て、娘と思いを共有してみたい、後で後悔の無いようにと、時間を作っては出掛けていました。

娘は生き生きとして、前向きに元気一杯、夢に向かって頑張っていました。

私にはキラキラと光る太陽のような娘でした。

神戸へ出てすぐの母の日に届いたプレゼントと一緒に手紙が入っていました。

『母さんへ。改めて書くこともないのですが、18歳になった区切りとして受け取ってください。頼りきりの18年でしたが、何とか自力でやっています。神戸に私を出してくれてありがとう。いつまでも元気で。』

また、この手紙とは別の手紙を見つけました。

それは、私が、裁判での心情意見陳述書の原稿を書こうと、家にあったレポート用紙を手にした時のことでした。

そこには、娘の日記のようなものが残されていました。

娘は、事件の3か月前、9月に珍しく長い休みが取れ、最後の帰省をしていました。

『9月19日から23日まで帰省。久しぶりに会った家族は元気そうで安心した。母は心配してたみたいで、食べとん、掃除しとん、と聞いてくれた。うちは海の近くで、潮風がとても気持ちいい。とても懐かしい気持ち。友達や母の

職場のおばさん、元バイト先のおばちゃんとか、色々行ってみた。みんな変わらずにいてホッとした。みんな「頑張っとな。辛くない。」って聞いてくれた。「私は図太いので全然大丈夫。」って言った。優しい人ばかりで良かった。沢山遊んで楽しかったのに、帰るときやっぱり寂しくて、家路に着くときちよつと泣けた。大阪で一人暮らしして、皆に心配沢山かけてるけど、私はここで頑張ろう。』

親として後悔することばかりですが、本当に私たちにとっては、愛くるしい可愛い娘でした。

まさか、あの帰省が最後になるなんて思いもしませんでした。

被告人と出会いさえしなければ、帰省した娘とあと何回楽しい日々を過ごせたことでしょう。

一緒に料理をしたり、旅行したり、娘の得意だったシフォンケーキの作り方だってまだ聞いてなくて、お正月に帰ってきた時に一緒に作るのを楽しみに、小麦粉、砂糖、色々材料を用意して楽しみに待っていました。

これから少しゆっくりとした時間を持ちたいと思っていた矢先の事件でした。

娘とは、事件前、再三、メール、LINE、電話で連絡を取り合っていました。

私が、娘の生前、LINEを入れたのは、事件の前日、12月6日午後6時過ぎでした。

少し肌寒くなってきたので、風邪などひかないでという内容だったと記憶しています。

娘から返信は返ってきませんでした。

すぐ返事が返ってくることもあれば、時間が空くこともあったので、別段気に留めることもありませんでした。

それから連絡を取り続けましたが、娘に繋がることは決してありませんでした。

最初は、携帯をどこかに落として失くしてしまったのかと思いました。

それでも、とても心配になり、学校とアルバイト先へ連絡を入れることにしました。

どちらも、今までにない無断欠席、無断欠勤と知らされました。

私は、娘の性格からして、そのようなことはとても信じられなかったので、不安で不安でたまらなくなり、主人と話をし、地元の警察署に失踪届を出しに行くことにしました。

地元警察署では、娘の特徴などを色々聴かれ、娘のiPhoneのGPS、位置情報の確認などを主人がお願いして帰りました。

今でも深く感謝していますが、地元警察署での捜査の取り組みは非常に早く、数時間のうちに娘の i P h o n e の位置情報が加古川周辺だということが分かりました。

このときは、藁をも縋る思いの私たちでしたので、その知らせはとても嬉しかったことを覚えています。

しかし、娘の友人は、加古川にはおらず、今まで娘の口からも聞いたこともない地名でした。

私は、それでも何か理由があって部屋にいるかもしれないと思い、すぐ大阪の娘の部屋にセコムの人に入ってもらいました。

娘はいませんでした。

この時は何も考えることができないくらい、言葉では表せないくらい、娘のことが心配で、心配でたまりませんでした。

結局、すぐにでも大阪へ駆けつけたかったのですが、セコムの関係で、翌朝早くから出掛けることになり、その後、情報を待ちました。

その日の夜、娘のことを心配して、娘の友人から電話がありました。

その友人は、娘がお金のトラブルに巻き込まれ困っていた、ということを教えてくれました。

私は、地元警察署に失踪届を出したこと、i P h o n e の位置情報が加古川周辺だということを話しました。

この友人との電話により、そのトラブルを解決してやると言っていたのは被告人であり、加古川は、被告人が住んでいる場所であるということが判りました。

被告人は、何か必要なら警察の事情聴取にも応じるし、娘が行方不明であるということを知ったかのように友人に話し、大阪へも娘を探しに行くと言っていたようでした。

私は、この時、この人が何か知っているのではないかと感じました。

翌日、不安を抱えながら、主人と大阪の娘の部屋へ向かいました。

朝から何も食べられず、でも、心のどこかで、バツの悪そうな顔をして、娘がひょっこり何処からか元気に帰ってくると信じて疑いませんでした。

大阪では、吹田署の刑事さん2人と娘の部屋に入り、調べました。

このとき、パソコンのルーターの下に隠すようにノートが1冊あるのを、吹田署の刑事さんが見つけてくださいました。

そのノートの中には、イラストやメモ、色々書いてありましたが、ある1ページには、「母さん、父さん、弟、愛してるよ。もし死んだらモロボシリュウノスケ」という走り書きが残されていました。

素直だけれど意地っ張りな娘が、生前一度も口にする事の無かった言葉で

す。

どんな気持ちで私たちにこの言葉を残したのか、今でもこの走り書きが全てだと思っています。

その当時、娘は、何かとてつもないことに直面していたのではないかと思います。

二度と、真実は娘の口からは聞くことができません。

私は、20年間、愛し見守り続けた娘を守り続けることができず、何の力にもなれず、たった一人で死なせてしまい、自分で自分が許せません。

その気持ちは、今も変わらず同じです。

どんなに辛かったことか。

どんなに悲しかったことか。

どんなに悔しかったことか。

娘が息絶える前、何を思ったことか。

苦しさと後悔で、今でも思い出すと、胸が張り裂けそうです。

しかし、私は母親であるのに、娘からはそれを知ることも聞くことも、もうできません。

娘の部屋からは、パソコンのルーターの下からノートが見つかった以外は、特に手掛かりはなく、部屋の片づけをしながら、警察からの情報を待ちました。ただ、モロボシユウノスケという名前には、全く心当たりがなかったため、昨夜の友人にその場で電話を掛け、紹介者である友人に聞いてもらいました。

モロボシユウノスケは、被告人の偽名であることがすぐに分かりました。

それでもまだこの時、娘が死んでいる、ましてや、被告人に殺されているなんて、想像もつきませんでした。

午後からも娘の部屋で手掛かりを探したり、片づけをしながら、警察からの連絡を待ちました。

その日は、特に進展はなく、一度岡山へ帰る身支度をしているときでした。

それは最悪の知らせでした。

加古川署からの電話でした。

加古川の川の中で、娘と同じ年頃の女性の遺体が朝発見され、確認を求めるものでした。

加古川でというのには不安がありましたが、そんなはずはないと、岡山に帰る途中だからまあ寄ってみよう、ただ確認するだけなんだ、水死体なんて有り得ない、娘は元気なんだ、「ごめんなさい。」と言って帰ってくるんだ、と色々自分に言い聞かせました。

でも、不安は拭い切れず、主人と沈黙のまま、加古川へ車で急ぎました。

加古川署へ着くと、しばらく署内のベンチで待たされました。

ただ、もう、その空気は、加古川で見つかった女性は、私たちの娘に違いな
いという雰囲気を感じ、足が震え、心臓は高鳴りました。

案内された場所は、加古川署の奥のとても寒いところでした。

白い布を顔にかけられ、布団に寝かされた遺体が安置されていました。

加古川署の刑事さんが、白い布を取り確認するようにお願いされましたが、
私たちにはできませんでした。

「違うんだ」、自分に言い聞かせていた言葉は、一瞬のうちに崩れ落ちてし
まいました。

ショックという言葉は通り越し、呆然として、涙も、言葉も、うまく出てき
ませんでした。

あまりの衝撃に、娘を抱きしめてやることもできませんでした。

「娘です。」と、一言、声に出すのがやっとでした。

娘の顔は、すぐに確認できるほど穏やかでした。

「あっ」と一言、声を発したかのように、口が少し開いていました。

小さいころから何一つ変わらない、あどけなさが残る娘の寝顔でした。

その時からずっと、私の脳裏には、このときの娘の顔が焼きついて離れませ
ん。

忘れたいのだけど、なぜか忘れてはならないと思う記憶です。

思い出すと涙が止まりません。

娘が発見されたのは、12月12日でした。

その日は、私たち夫婦の結婚記念日でした。

娘は、どうしても自分を見つけてほしくて、12月の冷たい川の中で一人、私
たちが探しに来てくれるのを待ち望んでいたのだと思い、胸が詰まりました。

「真白（ましろ）」という名前は、私が付けました。

いつも真っ白な心で、人を外見で判断することなく、真っすぐに穏やかに受
け入れ、そう願って付けました。

娘は、その願いのとおり、いつも笑顔を絶やさず、純粋な心で、素朴で、人
の気持ちの分かる、相手にそっと話の出来る女性に成長してくれました。

それでも、私は、大きな間違いを一つしてしまいました。

将来、被告人に出会ってしまったら、被告人のことだけは警戒するように、
疑いの心を強く持つように教えておくべきでした。

娘にとって、被告人との出会いは、娘の人生において、全く必要の無いこと
でした。

私は、被告人のことを絶対に許すことも、理解することも、信じることもで
きません。

真実は、娘の声を聞くまで、誰にも分からないと思っています。

娘は、被告人に対し、何の偏見も持たず、気に障るようなことも一切せず、接していたのに、殺されてしまいました。

日本の法律が認めてくれなくても、どんな見識のある方が異論を唱えても、命の償いは命でしかできない、と私は思っています。

人権と主張される方がおられるのなら、人の命を奪った人間は特別の人権であってほしいと思っています。

できることなら、娘の笑顔と夢と未来を返して欲しい。

私たちに生きる希望を返して欲しい。

そして、娘を、真白を返して欲しい。

ずっと、私が死ぬまで、この思いは変わることなく続くのだと思っています。

被告人の逮捕は、事件発生から2か月と少し経って、娘の21歳の誕生日の少し前でした。

後でお話を聞かせていただきましたが、捜査員の方皆さんで「真白ちゃんの日までには、犯人の逮捕の報告をしよう。」と、年末も年始も返上して頑張っていたいただきました。

また、取調べをしてくださった刑事さんが、犯人の起訴当日、真白に会いに、加古川から遠方にも関わらず、家まで来てくださり、手を合わせてくださいました。

強盗殺人で起訴できなかったことを申し訳ないと頭を下げ、大粒の涙を流し、娘と私たち家族に謝罪をされました。

当時の私たち家族の心境ですが、犯人が逮捕されてからは、一旦収まっていた過激な報道が、堰を切ったようにどのテレビ局でも取り扱われ、ネットでも憶測や興味本位な記事が掲載され、悔しさや悲しさで押し潰されそうな、ギリギリの精神状態でした。

しかし、その刑事さんの心ある言葉は、捜査に携わってくださった方全員の思いのように感じられ、胸が熱くなりました。

被告人への判決は、懲役22年でした。

被告人本人からも、両親からも、裁判中も、裁判後も、私たちに向けての謝罪の言葉はありませんし、それ以後も線香の1本もありません。

やっとの思いで出席できた裁判でしたが、真実は何1つ明らかにされないばかりか、見たくないもの、聞きたくないものばかりで、苦しきだけが残りました。

私は、犯罪被害者遺族になるまで、裁判は真実が明らかになる場所であり、どんな形であり、犯人、被告人と呼ばれる人たちは反省し、自分の罪を悔いるものだと思っていました。

それが、人として当たり前のように思っていました。

しかし、私が目にした被告人は、裁判は、決してそうではありませんでした。死んだ人間は、何一つ語ることができません。

自分の罪を軽くするためには、自分がその手で殺めた娘のことさえ罵倒します。

被告人が法廷で語ることは、それがたとえ口から出まかせの言葉であろうが、誰もが疑問に思うような作り話であろうが、証拠として採用され、真実に変わっていきます。

私は、ただ息をするだけの生活の中、生きる力もなく、また、この世の中で、一番憎くてたまらないはずの被告人にさえ、憎むという感情を持たず、裁判で戦う力などどこにもない状態の中、真実を知りたい、娘の最後の言葉を知りたい、その思いだけで裁判に臨みました。

裁判員裁判とは、被害者を助けるためにあるのだと思い、苦しみの中でも、娘のために頑張ろうと思い、裁判に参加しました。

しかし、裁判は決してそうではありませんでした。

先例に沿って刑が決められ、そして、何より被告人へ未来を与えるためのものだど知り、失望しました。

それでも私は思います。

自分の目で、直接裁判で被告人の態度や言動を知ることができたことは、私にとっては大きな意味がありました。

やっぱり、最愛の娘を信じていいんだ、これからも信じ続けていいんだ、と揺るぎないものを得ることができたからです。

私は、裁判までの間、聞こえてくる犯人側の言葉から、「もしかしたら、娘は、私の知らない良識の無い、悪い心を持った子供になったのではないか。」と、最愛の娘を疑ったこともありました。

しかし、裁判に行って、被告人の発言、態度を目の当たりにし、一瞬でも娘を疑ったことを自分が情けなく、娘に本当に申し訳ないことをしたと思いました。

娘は、私が知っている、誠実な、心優しい娘であったと、心から確信できました。

私は、今まで犯罪被害者ご遺族の方のことに関心を寄せておらず、自分とは全く無縁で、別世界のように思っていました。

しかし、犯罪被害というのは、いつ、誰の身に起こっても全く不思議でないということ、娘の事件を通し、思い知らされました。

そして、誰もが加害者になる可能性があるということも知りました。

娘は、確かに被告人によって殺害されたのですが、肉体的な死の後も、報道、SNSなどによって、娘も、私たち家族も、殺され続けました。

報道、SNSなどは、娘と私たち家族にとっては、第二、第三の加害者なのです。

報道の方がおられる前で、このような発言をすることについて、自分なりに色々と考えました。

ここにおられる方は、そのような心無い方などではないと思いますが、やはりこの場で、皆さん方にも、私たち家族のことをもっと知っていただきたい、もっと理解してもらいたい、という気持ちから、ここで話しすることに決めました。

娘の遺体が発見された翌日から、家の電話は鳴り続けました。

家の上空にはヘリコプターが飛んでいました。

昼夜を問わないご近所への取材、娘の通っていた小、中、高校、専門学校、養成所への取材、そして、主人の勤め先、主人の学生時代の同級生、息子が在学する高校へまで取材が及びました。

また、情報交換を求めるような手紙も何通も届きました。

息子は、学校からの帰宅時、家の庭の中で待ち構えていた記者に、家の中へ入るのを止められ、マイクを向けられました。

そして、心情を問われました。

こんな時に、悲しくない人がどこにいるのでしょうか。

本当に非常識です。

娘が卒業して間もなかった専門学校では、学校周辺へものすごい数の報道が集まり、在学生への取材は、日に日にエスカレートしていったとのことでした。

好意的に対応してくださっていた学校も、最終的には対処できなくなり、記者会見を開くという大変なご迷惑をかけてしまいました。

また、インターネット、テレビなどでは、私たちの知らないところで、勝手に娘の写真、動画、音声までもが、誰かによって提供され、流され続けていました。

娘は被害者なのに、なぜここまでされなければならなかったのでしょうか。

死んだ娘には、全くプライバシーというものは持てなかったのでしょうか。

最近の悲しい事件でも、やはり一部の心無い報道の在り方を見聞きしますと、その時のことを思い出し、強い憤りを感じてしまいます。

娘の葬儀には、知人、友人にはご遠慮をいただき、密葬としました。

今となっては、娘に可哀相なことをしてしまったと、親として本当に情けなく、その時の判断で良かったのかを考えると、胸が苦しくなります。

お通夜も、葬儀の日も、葬儀場には、沢山の報道に取り囲まれていました。

会場周辺でなく、高台から会場の中を撮影している記者の方もいて、私たちは、窓から離れた会場の真ん中にいることしかできませんでした。

まるでテレビのような沢山の報道の前に、私が思ったのは、何としてでも娘を守りたい、ただそれだけでした。

あまりの報道の多さに、出棺の際には、葬儀場の正面から出ることができず、葬儀会場の狭くて、暗い荷物置き場の通路を通り、裏口から逃げるようにして霊柩車ではなく、遺体搬送車で、娘を火葬場へ送りました。

遺体搬送車の中で、上下に揺れる柩（ひつぎ）をぎゅっと抱え込んで、短い時間を娘と一緒に過ごしました。

報道の自由、知る権利というものがあるのなら、私たちには、知られたくない権利、そっとしておいてもらう権利を持ちたかった。

私たちを支えてくれたのは人、そして、私たちに極限までの苦しみや悲しみを与え続けたのも人です。

どなたの身においても、決して、被害者にも、加害者にも、ならないで欲しいと強く願います。

もし、被害に遭われた方、また、ご遺族に接しなくてはならなくなった時は、今日私がお話したことを思い出し、寄り添っていただけたらと思います。

今回、私たち家族は、犯罪被害者サポートセンターではなく、岡山県警察本部犯罪被害者支援室を中心に、地元警察署、兵庫県警察本部、加古川署の支援係、捜査に携わっていただいた警察官の方々の、県を超えた手厚いご支援を受けています。

事件直後は、とても現実を受け止められず、どのようなお声がけ、お話を聞かせていただいても、全く耳には入らず、とても混乱した状態でした。

本来の支援の在り方も、制度なども全く知りませんでした。

そのような中、事件当初より、お世話いただいた警察官の方々に、ご無理をお掛けすることは、本当に多かったですと思いますが、ずっと今日まで、継続したご支援をいただけたことは、私や家族の大きな心の支えとなりました。

事件当初より、持っていくような悲しみや苦しい時間を共有していただき、越えて進んでいかなければならない、高くて険しい壁をいくつも乗り越えるお手伝いをしていただきました。

いつも、ゆったりとした心で寄り添い、ゆったりと話を聞いていただきました。

当時、自分を責め、報道に傷つき、娘の死も受け止められず、心を閉ざし、恐怖と悲しみで、家の外へ一歩も出れず、窓さえも開けられない状態の私は、締め切った窓より見える、外の電線に、雨の日も風の日も、じっと止まって離れず、私の方をじっと見つめている小鳥に気づきました。

朝が来るのはとても辛いのですが、それらを、娘が私の様子を心配しに見に帰ってきてくれたもののように思い、毎日楽しみに待つようになりました。

そんな日々の、普通の人には非現実的に思えるような話にも耳を傾け、お会いするたび、電話をくださるたび、「今日は、鳥さんはどうですか。」と私の思いを受け止め、優しく声を掛けてくださり、急ぐことなく、必要な話を進めていってくださいました。

また、娘と生前、一緒に蒔いた種の花がずっと咲かず、娘の死後、急に咲き出した話をすると、「真白さんのお花ですね。」と苗を持ち帰ってくださり、大事に育て、可愛がっていただいています。

また、私が、事件の真相が全く分からない中、ネットや報道の憶測に動揺し、娘のことを信じられなかった時も、「お母さん、真白さんを信じましょう。大丈夫です。」と、力強く言い続けてくださいました。

一緒に泣いたり、笑ったり、怒ってくれたり、苦しい時、いつも味方となり、応援してくださいました。

私の発する言葉、表情、電話での声、メールの文脈にまで、色々な角度から、少しの変化も見逃さず、気持ちの浮き沈みを察し受け止め、カウンセラー、被害者代理弁護士の先生方と連携を取りながら、解決への道を探し、考えてくださいました。

そして、全国初、被害者支援の警察官として、裁判員裁判へも同伴して下さり、法廷の中で、心情意見陳述書を述べる時もずっと傍についてくださり、一緒に戦ってくださいました。

警察官、カウンセラー、代理弁護士の先生方の、それぞれ専門的な知識を持ち寄り、私たち家族の見えるところ、見えないところで、情報を共有して下さり、私たちの今一番の状態をいつもいつも考えてくださっていました。

私にとっては、皆が警察官であり、カウンセラーであり、弁護士の先生でした。

いつも、心を繋いだ温かな支援の輪の真ん中で、不安を、苦しみを、取り除いていただきました。

このご支援の輪が無ければ、今の私、家族ではなかったように思います。

3年経過した今、なお温かなご支援をいただいています。

昨年は、大学生被害者支援ボランティアの学生さん方と、シフォンケーキを作るという楽しい時間をいただきました。

私が、講演の中で、娘のお正月の帰省時、一緒にシフォンケーキを作るのを楽しみに待っていたと話したところに、皆で心を寄せ、考え、「お母さんの夢叶えます。」と題し、会を計画し、私を招待してくれました。

皆それぞれ、学業に、アルバイトに忙しい中、設備のある施設、ケーキの材料、私にエプロンまで買って、プレゼントしていただきました。

娘との約束はもう一生叶うことはありませんが、純粹で、真つすぐで、一生

懸命な思いは、とても有り難く、愛おしく感じました。

そして、今年、「お母さんの夢かなえます 第二弾」を開いていただき、招待していただきました。

私のリクエストに応え、サンドウィッチと白玉団子を一緒に調理し、楽しませていただきました。

私が勝手にそう思っているのですが、大学生の男の子も女の子も、私にとっては、みんな可愛い「真白さん」で、嫌なことを忘れさせてもらえることのできる、何にも代えられない時間をいつもいただいています。

私は、この二年間、岡山県内の大学で話をさせていただいていますが、話を聞いてくださった学生さん方には、後にメッセージをいただいています。

私の似顔絵を添えて励ましの言葉を書いてくれた学生さん、当時何も知らないまま勝手な想像で、家族で報道を見ながら話してしまったことを「真白さん、お母さん、本当にごめんなさい。」と書いてくれた学生さん、親元を離れ一人暮らしの学生さんからは、「お母さんに電話を架け、声を聞きたくなった。」等々、皆それぞれの思いで、それぞれに何かを感じ取ってくださったようで、話の度、沢山の応援や感謝の言葉をいただいています。

私の方こそ、その思いは大きな力となり、感謝の気持ちでいっぱいです。

今年4月、三年半もの長い時間が掛かりましたが、ようやく加古川の犯行現場へ向かうことができました。

すぐにでもと思いつつも、気持ちが向かず、春が来て夏が過ぎを繰り返しているうちに、三年半の月日が過ぎていました。

支援室の女性警察官の方も、同様に三年半ずっと思っていてくださったようで、付かず離れず、私のことを見守り続けてくださった中で、今しかないと思われたのか、声を掛けてくださいました。

「お母さん、色々頑張って乗り越えてきたけど、これが最後、これだけなんです、できていないことは。私と一緒に、是非、真白さんに会いに行きましょう。」と言ってくださり、いつもどおりのパワーで、私を加古川へ連れて行ってくださいました。

兵庫の警察の方々にも、声を掛けてくださっていました。

支援室の方、当時捜査をしてくださっていた方、被告人の取調べをしてくださった方までもが、今では勤務地も変わってしまわれているのに、「真白ちゃんのお母さんが来られるのなら。」と声を掛け合い、集まってくださっていました。

当時、私たち家族のことを、親のように娘のように思い、丁寧な捜査、取調べをして、支えてくださった警察官の方々です。

私の知らないところで、事件後より、私たちに代わって、3日と開けず現場

近くに立ち寄り、手を合わせていただいていたたり、命日にはお花まで用意してくださり、娘が寂しくないように話をしてくださっていました。

当日は、雨で土砂降りでした。

加古川の中州ということで、潮の満ち引きもあり、水かさが増すため、ほんの少しの間でしたが、当日、土砂降りの中、事前に用意して下さった簡易テントの中で、雨に濡れることもなく、皆様の思いやぬくもりに包まれ、とても長い時間のように感じました。

残された娘の気配や忘れ物を、全て持ち帰ることができたように思っています。

私のいただいたご支援は、まだまだ沢山ありますが、どなたにおかれましても、損得勘定なしに、私たちと真剣に、同じ目線で向き合ってください、最大の力となれるよう考慮していただいたものばかりです。

実際、目で見えるもの、耳に聞こえるものだけでなく、心の目を通して私たちを見て、感じて、支えとなっていただけは、冷え切った心をポカポカと温かく包み込んでいただき、真っ黒に塗りつぶされた心を明るく照らす存在となっていました。

目に見えることだけを信じたり、数値だけで物事の価値や意味を判断するのではなく、目に見えなくても、そこにある思いや絆などを大切に思えてこそ、向かい合う相手との信頼関係が生まれるのだと思いました。

まだまだ沢山の応援をいただいている立場の私ですが、応援されながらも、自分にできる最大の応援を、誰かのために頑張れる自分でありたいと思っています。

お忙しい中、皆様にいつまでも何かして欲しいということでは、決してありません。

不満や憎しみ、悲しみだけに囚われ続けて生きていくのではなく、皆様にいただいた沢山のご支援を、一つも無駄にすることなく、大きな力に変え、私と同じように苦しんでおられる方、また、苦しまなくて済むよう、被害者、遺族の心情などを多くの方に知っていただけるように、声を掛けてくだされば、話をさせていたいただきたいと思っています。

とは言いましても、まだまだ途中、心が折れてしまうこともあるかも分かりません。

そのような時には、皆様には、私の心に掛ける保険のような存在になっていただき、弱い私を、導いていただきたいと思えます。

最後となりますが、最近でも、被害者には何の落ち度もない凶悪犯罪、交通事故が、不幸にも多く起きています。

そのような事件、事故をお知りになられたら、「今、被害者は、遺族は、ど

んな状況なんだろう。」と心を寄せていただけたらと思います。

近くのことでも、遠くのことでも、まず関心を持って思いやったださることは、被害者、遺族にとっては、とてもありがたい応援です。

どうぞ、よろしく願いいたします。

今日は、長い時間、本当にありがとうございました。

これから少しの時間、娘のDVDを見ていただこうと思います。

このDVDは、岡山県の犯罪被害者支援の大学生ボランティア「あした彩（いろ）」に所属している学生さんが、作ってくれたものです。

実際、このDVDの静止画ではありますが、裁判員裁判でも心情意見陳述書の時に使わせていただきました。

この大学生ボランティア「あした彩」は、私が講演の中で、学生の皆さんに「皆様が持っている温かい心の絵の具で、闇に包まれて、真っ黒に塗りつぶされた被害者、遺族の心のキャンバスに、明日へと続く、明るい道を彩るお手伝いをして欲しい。」と言った言葉から生まれた会です。

そして、このDVDの背後に流れている曲は、安田レイさんの「あしたいろ」という曲です。

私がとても辛かった時期に、私の思いと重ね合わせ、いつも聞いていた曲です。

安田さんとも、今年、2度、ご縁をいただき、お会いしました。

安田さんは、曲を通じ、被害者に、遺族に、応援を送ってくださっています。それでは、どうぞ、娘の笑顔を見てやってください。

《DVD上映》

今日は長い間、本当にありがとうございました。